

知恩

第一号

水戸殉難者恩光碑保存会を設立するに当たって

会長 大森信英



水戸殉難者恩光碑保存会は、幕末維新の時、水戸藩諸生派に所属して、国事に奔走し、各地に殉難・散華した人々の合同慰霊法要を行い、先祖を供養することを目的に、慰霊の会として設立したものであります。水戸市・祇園寺境内の水戸藩諸生

派殉難者慰霊の「恩光無辺の碑」は昭和9年に、水戸人の一部の人々の反対にも拘らず、碑建立の大恩人の室田義文翁の大英断により建立されたのであります。室田翁は、除幕式には決死の覚悟で臨席されたと言われております。

昭和11年9月23日には、殉難志士・第一回慰霊祭が祇園寺境内の恩光無辺碑前において、荘厳裡に厳粛なる式典が挙行されたのであります。当日、前宮内大臣・田中光顕閣下は令夫人を伴い、高井秘書を始め随員と共に式典に参列されたのであります。尚、この日は、安藤・茨城県知事、中崎・水戸市長、岩崎・水戸警察署長も式典に参列されたのであります。「水神社・広報」

その後、長い間、戦中「水戸空襲」戦後の大混乱など時代の変遷によりこの慰霊祭は行われませんでした。平成15年2月、諸生派歴史研究・仰天会より諸生派殉難者慰霊祭を中断したままでよいのか、

このままでは、この恩光無辺の碑は無縁のものになってしまうのではないかと、又、水戸藩幕末の史実が歴史の闇に消えてしまおうのではないかと、という危機感のもとに慰霊祭「祇園寺にて慰霊法要」を行うべきとの意見が持ち上がり、丁度、天狗党の乱後140年、建碑後70年の節目の年を期して、法要実行委員会を組織して、平成16年9月23日「水戸藩国難事件殉難者慰霊法要」を行いました。

私どもは、前回の法要実行委員会を発展的に解散して、更に、慰霊祭を継続実施すべく、昭和9年・先人の結成した「水戸殉難志士恩光碑保存会」を再興し、改めて、慰霊の会として、「水戸殉難者恩光碑保存会」を設立して慰霊祭を行い先祖を供養して参ることに致しました。

この水戸殉難者恩光碑保存会は、平成18年10月22日、祇園寺において、設立総会を開催して設立したのであります。その詳細については、会則及び決議書の通りであります。

又、この慰霊碑の建立の経緯については、金沢春友先生著書「久慈川水運と天狗党」に詳しく記載されていますが、一つだけ、東京での水戸史談会における心に残る室田義文翁のお話を、ご紹介し皆様のご理解を戴きたいと存じます。

次のとおりであります。

「水戸人の一部の人からは、奸党と呼ばれ、勅許の賊とまで罵られ、今日まで容れられざる先輩のために、絶えて成さざりし仏事を営み、同時に合同記念碑を計画したのである。今にして予「室田翁」がこれを決行せずんば、何れの日かこの拳を取って成すものはあるまい」と言われ、室田翁の大英断によって、諸生派慰霊の「恩光無辺の碑」は祇園寺境内に立派に立っているのであります。

室田翁は、天狗党の忠魂塔碑を建立し、続いて、諸生派の恩光無辺碑の建立に尽力されたのであります。翁の人物伝記については、史料により、皆様にお知らせする予定であります。「翁は天狗党出身の方です」

今、平成の世において、私どもにできる事は、殉難者を偲び、室田翁の意を戴して、心を一つにして、水戸藩諸生派殉難者を慰霊供養することであります。そして、この供養行事により、水戸藩幕末維新の歴史の真実を歴史の闇に消される事無く後世に伝える事が肝要であり、現代に生きる私どもの使命ではなからうかとさえ想うのであります。

この史実を教訓として、平和を祈願し、本会が、未長く持続される事を念願して、本会の設立、本会報発行のご挨拶と致します。

祇園寺諸生派慰靈碑碑文について
恩光無辺の碑 原文・漢文

恩光無辺

明治戊辰悲徳川宗家之衰廢
慨赴難者水戸藩士中不下数百人而

皇恩洪大録宗家後焉遺靈亦可以
瞑矣茲舉其姓名録于碑背云尔

昭和九年甲戌秋

朝比奈知泉 撰
室田義文 篆額

讀み下し 知恩 編集委員会

明治戊辰徳川宗家の衰廢を悲しみ

慷慨、難に赴く者水戸藩士中、数百人を下らず、

皇恩洪大宗家の後に録す、いづくんぞ遺靈亦以て瞑すべけんや、茲に

其の姓名を挙げ碑背に録して云とす

昭和九年きのえいぬ 秋

あさひな ちせん せん
むろた よしあや てんがく

碑文の大意 知恩・編集委員会
「大意は編集委員会の解釈です」

最後の將軍・徳川慶喜公は慶応3年10月14日大政奉還した。翌年1月に薩長藩の策謀・挑発により鳥羽伏見の戦争となり旧幕府軍は敗北、徳川慶喜公は朝敵となり旧幕府は崩壊し公は謹慎し、徳川本家は存亡の淵にあつた。

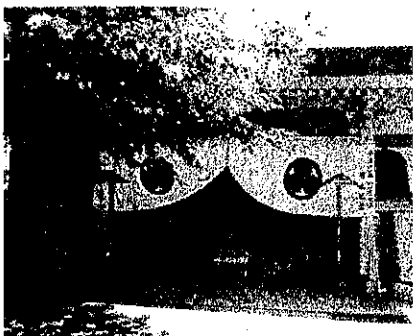
三家として本家を支援する立場にある水戸藩「諸生派」は徳川本家の衰退を悲しみ、又、薩長藩の策謀に憤激、数百人の藩士がこの難局に立ち向かった。東北列藩同盟の一翼を担い、会津軍とともに戦ったが戦局利あらず、多くの藩士が戦没した。最終的には西軍・薩長藩の勝利、東軍・会津藩の敗戦となり戊辰戦争は終結した。

戦国の習い、徳川本家は滅ぼされる所、天皇の至高の温情により徳川本家は存続を許された。有難い極みである。殉難諸士も安心されたい。又、どのようにしてこの難局に赴き殉難した人達を供養すべきであろうか。それは、殉難者姓名を挙げ、この碑の裏面に刻して冥福を祈ることとは云うまでもないことである。故にこの碑を建立したのである。

平成19年 夏 撮影
水戸市八幡町11-69
祇園寺 山門



祇園寺 本堂

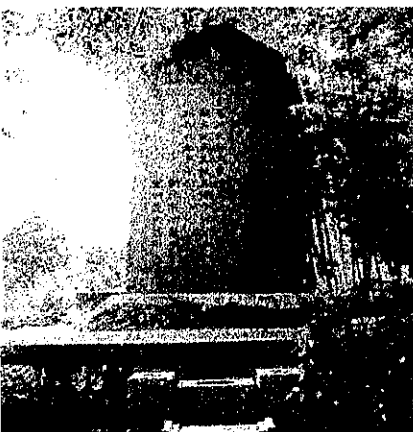


奉納 昭和9年

恩光無辺碑の碑文の「石摺り・表裏両面」を
田中光頭・元宮内大臣が奉納
されました。

- ① 多摩御陵 多摩記念館に奉納
恩光無辺碑「石摺り・表裏両面」
 - ② 大洗・東光台 聖像殿付属
常陽記念館に恩光無辺碑「石摺り」を奉納
- ※現在・幕末と明治の博物館

平成19年 夏 撮影
恩光無辺碑



水戸殉難者恩光碑保存会 会報・知恩

水戸藩国事殉難者姓名 恩光無辺碑裏面記録

天野伊内	磯崎に郎左衛門	岡野庄次郎	金子清藏	佐藤主税	鈴木三次郎	丹 誠之介	林伝三郎	宮田常之介	(井上)乙吉
赤林三郎兵衛	石川多七	岡部徳五郎	加藤木鉄	佐藤万右衛門	杉浦幸蔵	茅野善吉	橋本小三郎	宮田金蔵	(井上)亀吉
芦川市兵衛	江橋義之介	小山亀五郎	笠原昭平	斉藤繁之介	砂川銀之介	津田孝之介	林又次郎	宮田銀五郎	[今村]孫十
浅羽甚五衛門	岩上彦左衛門	小川辰蔵	兼山長八	佐野藤衛門	鈴木鉄太郎	辻島健蔵	香山宗七	宮崎弥介	(猪西)平介
芦沢勇七	磯崎宇左衛門	岡見市蔵	川又利平治	佐々木雲八郎	鈴木甚次郎	照沼泰介	塙富太郎	宮本謙吉	(猪西)林之介
阿部惣太郎	輪殿内匠	大森彦十郎	加藤太郎兵衛	佐野孫次郎	助川鉄太郎	寺門妻一郎	塙久七	宮井道先	(猪西)徳兵衛
朝比奈弥太郎	宇野野卯之介	岡部弘四郎	寛平三郎	佐々八次郎	杉山伊三郎	戸祭大膳	平松新右衛門	三代造酒之介	(猪西)銀蔵
朝比奈鞠負	薄井友衛門	大森善八郎	加藤幸吉	斉藤銀四郎	助川次衛門	友部八太郎	平松茂介	宮地藏介	(小貫)吉三郎
朝比奈新右衛	薄井宗七	小幡又蔵	鹿野定一郎	斉田金三郎	鈴木弥次夫	富田理助	楠山源太郎	村松彦六	(小貫)安蔵
青木又四郎	薄井七左衛門	大曾根又一郎	徑原鉄三	斉田悦之進	鈴木鉄一郎	戸祭久之丞	平尾金五郎	村松信蔵	(小貫)清兵衛
秋山長太郎	薄井宗作	小貫理三郎	川崎六郎	佐々八三郎	鈴木四郎太夫	友部八五郎	平山辰之介	村上源次郎	(志水)新八
朝比奈千次郎	薄井善吉	小田部津右衛門	川上捨三郎	斉藤捨松	鈴木三人	遠西伊三郎	平戸直蔵	村上三蔵	[鈴木]勝之介
相沢秀五郎	上彦四郎	大曾根理七郎	菊地善左衛門	佐藤敬之進	鈴木定五郎	友部徳之介	引田政平	村上仙介	[鈴木]鉄五郎
浅羽熊三	宇田川松之介	大内午之介	菊地願三郎	斉藤新六郎	杉山松之介	富田太右衛門	疋田伝八郎	村沢彦衛門	(鈴木)和介
安生謙三	梅原八郎兵衛	大木藤一郎	菊地太左衛門	櫻井又四郎	鈴木祐蔵	戸祭誠五郎	藤田主書	目黒安次郎	(鈴木)寛次郎
安食和七郎	内田鉄蔵	大橋金太郎	菊地善次	坂田兼右衛門	須藤眞八郎	外岡庄衛門	藤田半蔵	森太郎右衛門	(鈴木)彦八
安積西之介	海野志康	大嶺小太郎	木村政次衛門	佐藤貞之介	鈴木鷹之介	鳥羽純之介	藤田小衛門	森秀之介	(久見)熊吉
縣弘二郎	海野捨之介	小山金平	君島百平	佐藤賢男	鈴木伴七	戸崎留五郎	福王忠左衛門	森亀之介	(額田)久衛門
青木源四郎	氏川安三郎	大曾根熊太郎	木村千太郎	斉田金三郎	鈴木八郎衛門	豊島久平衛	稻田義介	百沢金蔵	
安部弥吉	宇土徳之介	大曾根午之介	木村蔵太郎	坂田三八郎	菅谷貞蔵	富田多介	藤田直之介	森山友衛門	以下・追加
芦沢祐七郎	海野敦馬	奥岩勘介	北岡彦八	斉藤領介	瀬尾弥市衛門	戸村三郎四郎	藤田大丸	谷田部八介	本紙面のみ
猪飼依衛門	打越所一郎	大嶺惣太郎	木村兼吉	坂田庄三郎	瀬尾辰之介	中沢勇三郎	福至宗之允	歴代書一郎	市川主計
石原主馬	大森弥三左衛門	岡崎藤衛門	木村弥一郎	斉藤賢蔵	高根秀三郎	鳴海何右衛門	藤田千之丞	安松元右衛門	江橋義之介
五百城健蔵介	小山小四郎	岡崎大次郎	楠太郎左衛門	坂田彦太郎	高野九郎兵衛	内藤儀左衛門	藤田松三	安松万次郎	小川喜衛門
磯野源四郎	荻庄左衛門	岡見幸蔵	久見悦之進	佐々木権次郎	高倉平三郎	内藤魁之允	藤咲伝之允	山本政次郎	薩山五郎兵衛
磯野長兵衛	荻 昇介	大内健蔵	因友忠之介	笹沼惣次郎	高田清吾	生井秀三郎	藤村吉郎平衛	安松彦五郎	駒井兵左衛門
生熊徳之介	大森金八郎	大森其太郎	久見新吉	佐々末吉	滝 徳太郎	名越八郎	藤田久蔵	安松佐一郎	近藤義太夫
石川新吉	太田十郎左衛門	小野利三郎	黒崎藤右衛門	笹沼隆次郎	高田秀三郎	生井岸次郎	藤谷一郎	山本繁太郎	小林藤介
石川源次郎	大井介衛門	小園兼次郎	栗原庄次兵衛	斉藤道順	田崎健次郎	中山新之介	藤谷省斎	山本道之介	小林源蔵
市川三左衛門	小笠原五平衛	荻谷彦八郎	桑名久三郎	佐川嘉次郎	田山金平	中山五作	深谷長四郎	山田又三郎	佐藤西之介
市川秀五郎	小笠原夫人たか	小田本新介	黒羽鉄五郎	澤田源八郎	高野定之介	中川淳一郎	藤田卯之介	矢島信之	佐藤平介
市川市平	大嶺彌右衛門	大沼平蔵	草根勘蔵	斉藤源太郎	高久彦三郎	長山長三郎	本郷金右衛門	山田惣次郎	斉田三左衛門
生熊丑次郎	大嶺惣一郎	小貫要介	倉田幸吉	笹島左太郎	高山豊次郎	中村乙三郎	堀口万吉	谷田部藤七郎	嶋田秀太郎
市川三次郎	小川内蔵之介	寛助太夫	黒澤与助	佐藤勝衛門	高田秀次郎	中野兵衛門	堀口万太郎	結城七之介	武石理三郎
生熊誠三	太田原伝蔵	河方竹之助	久賀安三郎	佐々木治兵衛	武石善右衛門	中村久蔵	細谷万吉	吉野英臣	中川彦四郎
磯野理三郎	大島理八郎	輕部熊太郎	久保菅衛門	塩津四郎左衛	丹下乙吉	生井松次郎	堀口庄次郎	依田喜佐衛門	内藤三之介
石川金之介	大関族之介	神山繁右衛門	児玉國右衛門	白須六郎右衛	高田重三郎	中川玄之介	堀江莊次郎	横山九郎衛門	長山清之介
岩沢政五郎	岡田左次衛門	徑原留三郎	小泉清吉	志水陸一郎	田口忠兵衛	中沢寅一郎	星左五郎	横山兵蔵	藤田主膳
一澤千蔵	小野瀧孫蔵	加藤孫三郎	鎌淵幸蔵	清水喜之衛門	高秀庄右衛門	清川駿四郎	前木元衛門	吉野金之介	樞王行之進
飯村庄蔵	岡本勇四郎	加藤木左内衛門	近藤助太郎	白石要介	田口忠兵衛	長山徳十	松田半左衛門	吉村直三郎	深田八郎
市毛佐一衛門	大木善之進	片岡雄蔵	小室善兵衛	鳥根平十郎	武石勝七	長澤龜之介	益子民部左衛門	吉田新介	本郷清一郎
岩崎勝次郎	岡見彦五郎	加岡祐介	小泉佐十郎	鳥根梅之助	武石次衛門	西野徳平	益子寛介	渡辺伊右衛門	松葉伊右衛門
市毛久左衛門	大宮金之介	河合伝次	後藤桑之介	庄司清一郎	立原健介	額田久兵衛	益子弥兵太	渡辺富之進	皆川佐兵次
飯村広蔵	尾羽権次郎	加藤山三郎	後藤小平太	庄司善次郎	田口理八	額賀興次衛門	松本辰蔵	渡辺長兵衛	武留井寅之介
伊藤銀蔵	尾羽権之介	寛平十郎	小室金一郎	鳥崎左介	高橋保次郎	沼田豊也	松葉介之丞	渡辺稻之丞	谷田部獅子之
飯島要之助	岡野信三郎	川上庄介	後藤郡司	鈴木長門守	高安與衛門	額田藤四郎	松井秀之進	渡辺安太郎	安松仙吉
市毛誠衛門	大嶺雲八	河合子之吉	鯉淵善蔵	鈴木石見守	武留井寅之介	根本新八郎	前島津徳	榊引隆三郎	山下雄蔵
今村喜左衛門	小川要之助	柏 徳之介	小西清八	鈴木茂衛門	平 辰之介	根本庄吾	松本富吉	和田銀平	佐川民三郎
岩間勝次郎	大久保貞蔵	柏 松之介	小池兼蔵	鈴木謙之介	高橋松兵衛	根本清右衛門	松葉誠蔵	渡辺吉次郎	山形次郎左衛
井上和次郎	太田源五郎	金子久三郎	後藤吉兵衛	鈴木欣一郎	田島重次郎	根本悦之介	増子幸十郎	榊引久右衛門	結城寅寿
岩間啓介	大森金六郎	鴨志田孫三郎	小林捨之介	杉山與七郎	田崎年次郎	根本清之介	松本五郎右衛門	和知忠三郎	
稻垣平太郎	岡田熊太郎	窪村民之進	小松崎次郎兵	鈴木任蔵	高倉常五郎	根本宗衛門	松村栄次郎	和知久四郎	
岩間善吉	大高弥兵衛	金沢藤之助	小泉兼太郎	鈴木亮三郎	高野金七	野澤儀右衛門	松尾虎吉	和知三太郎	
磯野玄達	大久保久八郎	徑原善介	後藤庄介	鈴木常之介	高野田衛門	野村喜左衛門	松尾吉五郎	渡辺哲之介	
江橋清介	尾高理右衛門	薩山又十郎	小島為四郎	鈴木運之介	田 準之介	栖木儀殿之進	丸山善次	渡辺權之介	
猪西貞之介	荻勇太郎	柏原壮衛門	小泉藤三郎	鈴木新治郎	高橋木一郎	野澤三郎衛門	松本辰三	[井上]鉄吉	
市毛子之吉	小田部壮三郎	川勝清太郎	佐藤四書	鈴木貞蔵	高橋與蔵	野澤藤一郎	松本長衛門	(井上)六蔵	

慰霊祭 昭和11年9月23日

水神社発行 水社みと第2号より
恩光無辺碑前における第一回慰霊祭
に前宮内大臣・田中光顯閣下が94歳
のご老体をお厭いなく参列され又
毅然として演壇に立たれ、次のこと
く説き起こされて、

「この聖代に於いて諸生天狗などと
は有る間敷きことなり・云々」と頗
る明快簡潔に結ばれたのであります。

田中光顯閣下のご紹介

※大洗・常陽明治記念館 hp より

田中光顯 たなか みつあき

天保14年1843→昭和14年1939

明治の宮内大臣。土佐藩士、武市瑞
山に師事し、勤皇党に属して、尊王
攘夷運動に加わった。のち中岡慎太
郎に兄事し、薩長同盟に協力して、
陸援隊を統率した。維新政府では、
明治4年、岩倉具視の随員として、
欧米諸国を巡遊。のち元老院議員、
警視總監、学習院長を歴任し、明治
28年宮内次官31年宮内大臣となり、
その後11年間大臣職にあり、宮中に
大きな力を持った。退官後は
「維新烈士」の顕彰に余生をささげ、
多摩聖蹟記念館、大洗・常陽明治記
念館、郷里佐川の青山文庫の建設や
維持に貢献した。
明治40年伯爵を授与される。
年97歳にて没。

前宮内大臣・田中光顯閣下の講話

「要旨」

明治維新の際佐幕派にして戦没し
たる者のため碑が建てられて本日そ
の慰霊祭を行うと言ふ談を聞いて、
私は本日此処に来たものであります。
さて、明治戊辰の際に於いて水戸藩
士が二つに分れ、一方は天狗派と称
し一方は諸生派と称して互いに相軋
りその果ては多々数のあたら武士が
斃れたのであります。この事は水戸
にとつて誠に遺憾の極みでありまし
た。それが水戸では今日「昭和11年」
に至るまで根に葉に思つていて何か
につけても溝が出来る様になること
があると云うのは実に心外に存ずる
次第であります。

然るに今回佐幕派即諸生派の為に
碑が建てられてその英霊を慰むるに
至つたことは洵に結構なことで私は
衷心から大いに喜んで居ります。昔
鹿児島島の島津公は朝鮮と兵火を交え
た時、朝鮮人も大いに殺されたし又
我國の者も戦死した者が少なくなか
つたが、島津公はこの時敵味方の区
別なくこれを弔い祠を建てその霊を
祀つたと言ふことであります。一旦
死したる以上は神に帰するもので
あれば仮令敵であろうとも当然その
霊を祀るべきものだと思ふのであり
ます。それに当水戸藩における天狗
諸生の両派はほんの兄弟とも言ふべ

きものであつて、一方は勤皇党と称
するも、左幕派は又数百年間祿を食
んで居つた、その藩主又は幕府の為
に忠を尽くすべく生命を投げ出して
戦つた者であつた。各其主義は異な
るもお上に対し忠誠の精神に於いて
は敢えて差あるものにあらざるべく
決して自分一人の為、又利己的に出
たものでは寸毫もないのであります
ればその純潔なる精神は洵に天晴れ
なるものがあると私は思ふのであり
ます。然るに、一方天狗派の者に対
しては碑を建て塔を設けてその英霊
を崇め、一方の諸生派の英霊に対し
ては顧みないと言ふのでは片手落ち
の感があります。今回この地に諸
生派の英霊を鎮めたのは洵に喜ばし
い次第であります。

要之戊辰の際に於ける水戸藩のご
たごたは全く兄弟喧嘩の様なもの
でありましたのですから今日は両派の
英霊が地下に於いて互いに握手をし
て居ることを思えば私は甚だ喜びの
情に堪えません。私はこれを持って
一言皆様に御挨拶いたします。

右終えて田中閣下は副会長の案
内にて市川三左衛門家及び朝比奈弥
太郎家の両墓所に詣で香花を手向け
られ爾後直ちに長者山山麓に建立せ
られたのであります。

室田義文翁の談話

水神社発行 水社みと第2号
昭和11年10月・春秋第15号より

恩光碑保存会・初代副会長・関東氏
との直話

関・曰く

室田先生は一個人にて近き将来に
おいて左幕派慰霊碑を建立するの御
意図ありと聞く何卒其御趣旨を拝承
致度し云々。

翁曰く

格別の理由はなきも、弘道館時代
の友人が諸生派に属し大部分仆れて
居るを以て頗る同情に堪えざるの余
り其挙に出でんと企画しあるは事実
である。兎に角、昭和聖代の今日、
天狗諸生でもあるまいじゃないか。
一方に勤皇派忠魂塔が建立せられた
のであるから、此の際左幕派の為、
建碑をなすことにすれば会ては彼我
主義の相違より出発点を異にし互い
に反目殺戮を敢えてしたる殉難志士
の英霊も笑つて地下に握手し既往を
語り合い喜んで呉れるだろう。

要するに、両派共に、各其の君に
対して尽くしたる誠忠に至つては、
豪も異なる所はないのである云々。

各地にある諸生派殉難者慰霊碑
「現在わかっている所」
順不同

- 1 恩光無辺の碑 水戸・祇園寺
碑裏面に殉難者姓名記録あり
昭和九年 室田義文翁建碑
室田義文翁 篆額
- 2 朝比奈知泉先生 撰文
慷慨淋漓の碑 水戸・神応寺
大慰霊碑の拓本のみ現存する
明治十七年 裏面姓名不詳
諸生派子孫有志 建碑
旧会津藩主松平容保公篆額
東京大学南摩綱紀先生撰文
水戸藩志士弔魂碑
- 3 碑裏面に殉難者姓名記録あり
朝比奈知泉先生 撰文
大正十五年 地元有志 建碑
「戦死二十五人墓」碑
明治二年 地元有志 建碑
「百年祭記念」碑
昭和四十一年地元有志 建碑
千葉県旧八日市場市松山
水戸藩諸生覚醒魂碑
- 4 会津若松市の飯盛山下
白虎隊記念館・隣接地
平成十二年 来栖平造氏ほか
諸生派子孫・仰天会有志建碑
北越戊辰の役当処戦没者供養塔
碑裏面に殉難者姓名記録あり
平成元年 建碑
地元と茨城県内有志が建立
- 5 新潟県 荒木家光氏ほか有志
茨城県 上野清彦氏
野口栄治氏
稲田秀雄氏
供養塔近くに戦没者の埋葬塚
が三つある
供養・地蔵尊像
平成五年 来栖平造氏建立
新潟県柏崎市西山灰爪の丘
同所は荒木家の所有地で
氏の力に負うところ大である
- 6 家老・佐藤図書信近 墓所
新潟県寺泊町 法福寺
埋葬場所に小さな石が3個
目印としてある
寺に立派な戒名の位牌あり
戦死者供養碑 宝寿寺
栃木県湯津上村片府田
地元村民有志 建碑
建碑年月不詳
- 7 赤沼獄刑死者弔魂碑
水戸市 赤沼獄舎跡
地元有志 建碑
建碑年月不詳
- 8 家老・市川三左衛門 慰霊碑
水戸市 長者山山麓
地元有志 建碑
建碑年月不詳
長岡原刑死者・弔魂之碑
水戸市 蓮乗寺
地元村民建碑
長岡原よりこの寺に移す
- 9 水戸藩士常磐共有墓地
徳川光圀公下賜の藩士墓所
水戸藩士殉難者 多数
水戸藩士酒門共有墓地
徳川光圀公下賜の藩士墓所
水戸藩士殉難者 多数
- 10 吟味役・中川彦四郎の墓
栃木県湯津上村佐良土箒川辺
地元村民有志 建碑
大番組・戸崎留五郎の墓
新潟県弥彦 宝光院
目印・小石のみ
- 11 家老・結城寅寿朝道の墓
常陸大宮市長倉一蒼泉寺
郷土・薄井友衛門昌股の墓
常陸大宮市鷺子一族墓所
- 12 水戸市 長者山山麓
市川三左衛門 慰霊碑
水戸市
- 13 水戸で被殺害 27人
14 水戸にて 自刃 23人
15 八日市場 戦死 26人弔魂碑有
16 場所不詳 刑死 66人
17 場所不詳 戦死 34人
18 場所不詳 自刃 3人
19 千葉銚子 戦死 1人墓碑有
20 江戸藩邸被殺害 10人
21 下妻 戦死 1人
22 祝町 戦死 1人
23 那珂湊 戦死 2人
- 14 水戸 刑死 85人弔魂碑有
10 野州馬頭 戦死 19人
11 水戸弘道館戦死 87人
12 水戸 刑死 85人弔魂碑有
9 会津若松 戦死 14人鎮魂碑有
8 越後 戦死 15人
7 馬頭見張場戦死 16人
6 与板見張場戦死 8人
5 北越市の坪戦死 19人
4 北越与板 戦死 29人
3 北越灰爪 戦死 49人供養塔有
2 北越宮川 戦死 11人
1 北越権谷 戦死 15人



- 各地の戦いでの水戸藩諸生派殉難者
場所及び戦死者と刑死者・「概数」
- ①各地戦死者 561人
 - ②各地刑死者 347人
 - ③各地殺害された者 151人
 - ④各地で自刃した者 37人
 - ⑤各地で自刃した者 26人

水戸殉難者恩光碑保存会設立経過

事務局

平成18年

7月 有志による発起人会
8月 設立準備会開催

10月 水戸殉難者恩光碑保存会
設立総会開催

会則・決定

顧問、役員選任決定
11月 連絡可能な殉難者子孫、及
本会趣旨にご賛同の方に設
立総会結果通知する

11月 連絡者より本会入会の
手続きが始まる

平成19年

1月 第1回事務局会開催
法要計画案検討

2月 第1回役員会開催
法要具体的計画検討

4月 第2回事務局会開催
具体的実行計画案決定

5月 第2回役員会開催
法要具体的実行計画決定
代議員選任決定

役員役割分担決定
各委員会設置、

8月 第3回役員会開催
法要具体化詳細計画決定

9月 水戸藩国事殉難者慰霊
法要 執行

寄付戴いた方を報告致します。

事務局

殉難者供養寄付金並びに
本会設立及び運営資金として
寄付金を次のとおり皆様より
戴きましたのでご報告致しま
す。

寄付金は恩光碑保存会および
恩光碑保存会基金特別会計に
入金させて頂きました。
ご芳志有難う御座いました。

期間平成18年9月から
平成19年9月30日まで

「順不同」

- 金六千円也 大森信英様
- 金七千円也 朝比奈光一様
- 金六千円也 藤山二郎様
- 金六千円也 清水光夫様
- 金六千円也 前沢瑞穂様
- 金八千円也 川上有文様
- 金六千円也 朝比奈泰仁様
- 金老万壱千円也 門井 貢様
- 金三千円也 野澤 汎様
- 金六千円也 一澤勝男様
- 金三千円也 大曾根豊治様
- 金七千円也 大森信男様
- 金三千円也 岡見 肇様
- 金六千円也 寛陽之助様
- 金七千円也 戸祭勝文様
- 金六千円也 平戸吉衛様

金六千円也 綿引周一様

金三千円也 田崎 裕様

金老万円也 清水テル様

金老万円也 川上京子様

金五千円也 佐藤万里子様

金老万円也 岡田 広様

金五千円也 市村眞一様

幕末維新水戸有志
を偲ぶ会室伏勇様

以上

現地慰霊について

現地慰霊実行委員会

会則により、平成19年度(第2期)
は、祇園寺の法要はありませんので、
現地訪問慰霊を計画しております。

第一回は、日帰りの予定にて、水戸
藩諸生派壊滅の地である千葉県匝瑳
市八日市場訪問を計画しますので、
ご連絡致します。後日、詳細事項を
お知らせ致します。

最低催行人員・20人

新規子孫調査について

新規子孫調査委員会

未だ、多くの諸生派殉難者子孫の方
が所在不明であります。一人でも、
多くの子孫を探して共に先祖の供養
をして参りたいと念願しております。
今回、法要執行にあたり七人の方が
子孫である事がわかりましたのでご
連絡致しました。

お知らせの方がおりましたら是非
ご連絡をお願い致します。

編集後記

本会報の内容については、情報の
双方向性を考慮し、会員の皆様の所
に秘蔵されているであろう史料があ
りましたら是非コピーのご提供をお
願いたいと存じます。

諸生派の史料は殆どありません。
今後、皆様のご寄稿も宜しくお願
い致します。

今後、各種資料を収集し皆様に
紹介して参る予定であります。

第1回・9月22日慰霊法要に
ついては会報知恩第2号で報告させ
て頂きます。

水戸殉難者恩光碑保存会・会報
知恩 第一号

平成19年10月15日 発行

- 発行人 大森信英
- 編集責任者 前沢瑞穂
- 編集委員 朝比奈幸一
- 々 清水光夫
- 々 野沢 汎
- 々 川上有文
- 々 綿引周一
- 編集印刷 事務局